

いじめ場面における目撃者の役割取得と共感が その後のいじめ関連行動に及ぼす影響

The influence of witness's role-taking and sympathy on their later behavior in the situation of bullying.

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

水野正幸

Masayuki Mizuno

目次

I. 先行研究のレビュー

II. 第1研究

1. 問題と目的
2. 方法
3. 結果
4. 考察

III. 第2研究

1. 問題と目的
2. 方法
3. 結果
4. 考察

IV. 今後の課題

1. 第1研究の課題
2. 第2研究の課題

引用文献

I. 先行研究のレビュー

いじめに関する研究は、今日までに日本だけでなくイギリスやアメリカ、アジア諸国においても数多く行われてきた（デルウィン・P・タツム、デヴィッド・A・レーン、1996 など）。その中でも日本におけるこれまでのいじめ研究では、加害者のいじめ行動の促進要因や抑制要因に関する検討が精力的に行われてきた（大坪、1999）。しかし、現代のいじめが持つ特徴などから、加害者や被害者だけに焦点を当てた研究からの脱却が求められていると言える。そのきっかけとなったのが、森田・清水ら（1994）によって提唱された“いじめの4層構造”（図1）である。この“いじめの4層構造”論が展開されて以来、「傍観者」に焦点を当てた研究・調査が、いじめ問題に関わる教育分野、教育心理学分野、社会心理学分野等で広く求められている。

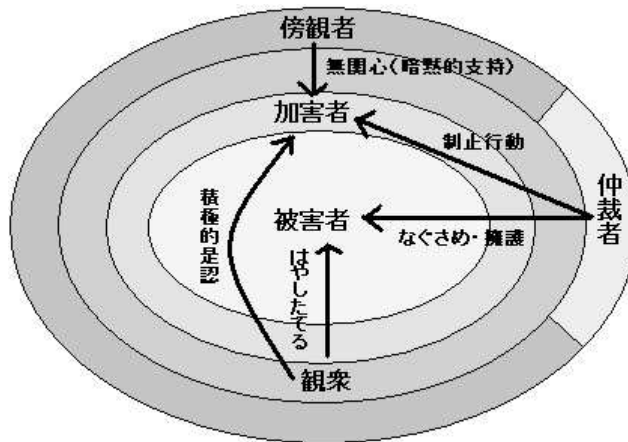


図1 ※森田・清水（1994）より筆者図化

森田・清水（1994）は「いじめ集団の4層構造」を、「いわば教室全体が劇場であり、舞台と観客との反応によって進行する状況的ドラマである」とし、いじめの「観客」の役割を担っているのが「観衆」、「傍観者」であるとした。さらに「傍観者」は、加害者に対して「暗黙的支持」という働きを有している役割である、とも示唆している。これに関連して斎藤（2000）は、「傍観者が加害者に対して同調意識を持ち、加害者に同調して行動することによって、いじめへの歯止め（反作用）が消失してしまう」と指摘している。つまり傍観者への介入を行うことによって、“いじめへの歯止め”機能の復活が期待されているのである。そのため、傍観者への介入についての研究が求められていると考えられる。

またその他の理由として、傍観者はいじめへの直接的な介入が可能な存在だという点が挙げられる。橋本（1999）によると、いじめが沈静化する出来事の1つとして“加害者自身がいじめをやめようとする”ことがあるが、加害者がいじめをやめようと思うのを待っていると、その間にいじめが深刻化する可能性があるとも示唆している。さらに現代のいじめの特徴として、大坪（1999）は、いじめの

可視性の低下を指摘している。つまりいじめが行われている場面が、外部から見えにくくなっており、その実態が把握されにくいという現状がある。そのため、外部の人間がいじめに対応を行なっていくよりも、いじめ現場にいる人が直接対応する方が、早急ないじめ抑制につながる可能性が高い。

ここで、筆者が重要な研究と位置づけている蔵長・片山・樋口・深田（2008；以下、蔵長・片山らと表記）の研究を紹介する。蔵長・片山らは、傍観者への介入が早急ないじめ抑制をどのようにもたらししていくかを追求するため、「傍観者がいじめ場面において取りうる行動とそれを規定する要因」について研究を行った。この中で蔵長・片山らは、「傍観者」という役割を持つ人々を、「いじめを目撃しつつもその時点で何もしていない者」という立場に最も近い人とした。そしてこの「傍観者」に対してより積極的にいじめ解決に向けて行動するように促すといういじめ対策が、「実現可能であり、有用である」と考えた。

蔵長・片山らは「傍観者」のいじめ場面における行動を規定する要因として「共感」と「役割取得」を仮定した。「共感」とは、感情体験をしている他者に対して、相手と同様の感情が生じたり、相手の状況にふさわしい感情が生じること（登張，2005）とされており、もう一方の「役割取得」は“相手の立場に立って相手の気持を想像する”という意識的なモードとされている。

蔵長・片山らは、いじめ場面において役割取得と共感を行う対象を、先述の森田・清水らが提唱した「被害者」，「加害者」，「観衆」，「傍観者」の4者であると仮定した。さらに、1）共感の度合いがいじめ関連行動に及ぼす影響，2）役割取得の度合いが共感に及ぼす影響，3）役割取得の度合いがいじめ関連行動に及ぼす影響，の3点において因果関係を仮定し、これらの関連性について検討した。これによって、「傍観者にどの立場の者の気持を想像するように促すことがいじめ対処にあたってより効果的であるか」を調査し、傍観者に対する具体的ないじめ対策を示すことを目的とした。

以上の目的を達成するために、大学生243名（男性67名，女性175名，不明1名；平均年齢20.4歳）を対象とした集合調査法による質問紙調査を行った。調査の手続きは、いじめ場面のシナリオ（ページ8）を呈示した後、役割取得，共感，いじめ関連行動に関する質問（ページ9）についてそれぞれ5件法で回答を求めるものであった。呈示する場面のシナリオは従来のいじめ研究（熊谷，2006；清水・瀧野，1998；杉田ら，1989；竹ノ山・原岡，2003；塚本・田名場，2007）のシナリオを参考に4種類のシナリオを作成している。

蔵長・片山らの分析の手順と結果を、1）因子分析，2）共分散構造分析の順に分節して以下に示す。

1) 因子分析

質問紙調査によって得られたいじめ関連行動の質問項目の点数から、探索的因子分析（主因子法，Promax 回転）を行い、構造の検討を行った。なお、役割取得と共感には「被害者」，「加害者」，「観

衆」，「傍観者」の4者を構造として仮定した。因子分析の結果，3因子が抽出された。最終的な探索的因子分析の解における回転前の累積寄与率は62.22%であった。

因子分析の結果，第1因子はいじめを面白がったり，はやしたてる内容の項目から「はやしたてて行動」。第2因子は，被害者をなぐさめたり，いじめを仲裁する内容の項目から「被害者援助行動」。第3因子は，いじめをただ見ていたり，無視するといった内容の項目から「傍観行動」と命名した。

2) 共分散構造分析

傍観者の役割取得が共感やいじめ関連行動に及ぼす影響について検討するため，先に仮定した因果関係間において，パスを仮定し共分散構造分析を行った。なお構造毎の検討の結果，いじめ場面で起こり得ないとされた構造を削除し，十分な内的一貫性が見られない項目は潜在変数を用いた。共分散構造分析では，有意でないパスを削除するなどの修正を行い，単純化したモデルを作成した。8箇所の修正の結果，GFI=.920，AGFI=.852，RMSEA=.086となり，許容範囲の適合値が得られたとした。共分散構造分析における結果を表1に示す。

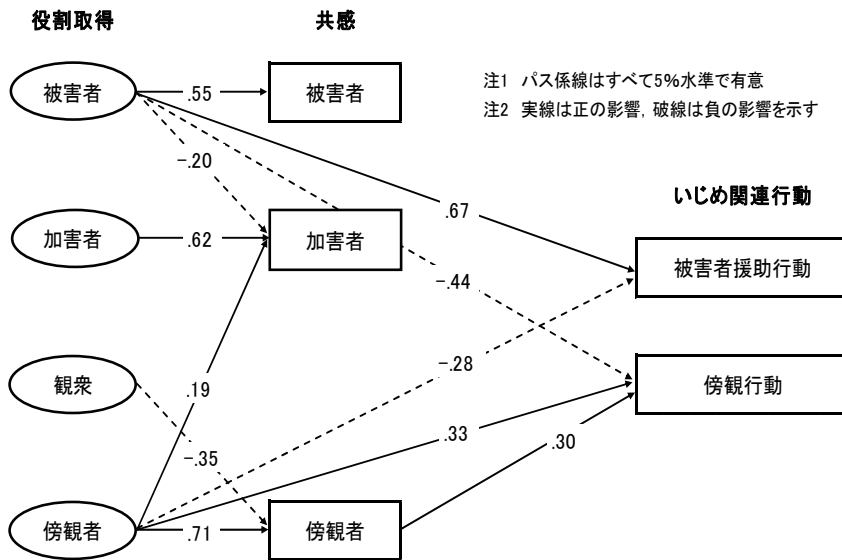


表1 共感が生じてからいじめ関連行動に至るまでの因果モデル(蔵永・片山ら, 2008)

分析の結果，共感においては傍観者に対する共感が傍観行動を促進し，被害者や加害者に対する共感はいじめ関連行動に影響を及ぼさないことが示された。役割取得では，被害者に対する役割取得と傍観者に対する役割取得がいじめ関連行動に影響を与えていることが示された。そして加害者に対する役割取得と共感はいじめ関連行動への関連は見られなかった。

蔵長・片山らはこれらの得られた結果から，次の3点について考察している。

1) いじめ場面において生じる役割取得，共感，いじめ関連行動

いじめ場面に遭遇した傍観者は，観衆の気持ちは想像はするが，その気持ちに共感していないとい

うことであり、いじめに加担するような行動はとらない、ということを示している。その理由として、調査で用いたシナリオの中に、被験者自身とその他の登場人物との関係性が明確に示されていない、を挙げた。

2) 共感が生じていじめ関連行動にいたるまでの過程

因果モデルを検討した結果、いじめ関連行動に影響を及ぼしているのは、共感よりも役割取得であることが示された。さらに、被害者に対する役割取得と、傍観者に対する役割取得とで、正反対の影響を及ぼしていることが示された。被害者の気持ちを想像した傍観者は、自身のいる状況を「援助する人がいる状況」と認識しやすくなり、被害者援助行動が促進され、傍観行動が抑制されると考えた。

一方で、他の傍観者の気持ちを想像した傍観者は、「援助の必要な人はいるが、援助を行わなくても問題ない、もしくは援助を行うことが問題である可能性のある状況」として認識し、その結果傍観行動が促進、被害者援助行動が抑制されると考えた。以上から、傍観者のいじめ関連行動は、“自身がおかれた状況がどのような状況であるか”との認識から影響を受けている可能性があるとした。

3) 結果から示唆されるいじめ対策

ここまでの結果から、傍観者に対するいじめ対策として、被害者に対する役割取得を促し、傍観者に対する役割取得を抑制するという対策が有効であるとした。さらにいじめを抑制するためには、傍観者になりうる人々に対して、いじめの被害にあっている者の気持ちを想像することを促すようなトレーニングが必要だと考えた。その際、積極的に援助を行わない者が周囲にいることや、その者たちが援助しない理由等を呈示することは、かえって傍観行動を促進する可能性があるため、避けるべきであるとした。

最後に蔵長・片山らは、自身らの調査において、傍観者に対していじめの抑制を促す対策を十分に明らかにするために、3点の課題を挙げている。

まず、役割取得がいじめ関連行動に影響を及ぼすまでの過程において、傍観者の中に「今の状況がどのような状況であるか」という認識が介在するという点への実証的な検討が望まれる、という点。

次に、扱ったいじめの種類が「無視」であったという点。分析の結果はやしたて行動などは起こらないと示されたが、例えば「からかい」といういじめを取り扱った場合、傍観者においても、観衆への共感やはやしたて行動が起きる可能性があるため、今後はいじめの種類多様性を考慮した研究が求められるとした。

3点目に、シナリオにおいて記述した被害者と加害者が普段から仲のいい関係であると呈示したことや、被験者（傍観者）と他の対象との関係について特に言及していない点であるとした。いじめ場面における4者間の普段の関係や、それらと被験者（傍観者）との普段の関係によって各対象に対する役割取得や共感、いじめ関連行動の生じやすさが異なる可能性があるとし、今後は登場人物間の普段の関係をも考慮した研究が必要だとした。

Ⅱ. 第1研究

1. 問題と目的

本研究を行うにあたり、Iで取り上げた蔵長・片山ら(2008)の『いじめ場面における傍観者の役割取得と共感が自身のいじめ関連行動に及ぼす影響』を本研究に先行する研究とした。本研究の問題と目的を以下に示す。

(1) 「目撃者」という語を用いる理由

蔵長・片山らは、表題および研究において「傍観者」という語を用いたが、筆者はこの点に強く矛盾を感じた。筆者は「いじめが今まに行われている場面において、傍観者に傍観する以外の行動を期待するのは現実的ではない」と考える。なぜならばいじめ場面における傍観者の定義は、森田・清水(1994)によれば「いじめを見ながらも知らぬふりを装っている子どもたち」とされており、坂西・岡本(2004)、餅川(2011)が紹介した Salmivalli の参加役割理論によれば傍観者とは、“「いじめ」に対して無関心な態度を示す者”とある。

つまり傍観者とは、「いじめを目撃した後に、様々な状況因や理由から、最終的に見て見ぬふりをする、という行動を選択した者」なのである。また橋本(1999)は「いじめ行動そのものに関心をなくした者たちがいじめ集団へコミットしなくなり、傍観者層を形成する」と述べている。以上からいじめ場面における傍観者とは「いじめ場面にまったくコミットしない」という点に大きな特徴を持っていると考えられる。そのため傍観者を「いじめを目撃しつつもその時点で何もしていない者」を表現する言葉として用いるのは不適切であると考えたのである。

そのため本研究においては、「いじめを目撃しつつもその時点で何もしていない者」をより厳密に説明しうる言葉として、「目撃者」を用いることとした。そして、『「目撃者」がいじめ場面を目撃した後に、役割取得、共感、いじめ関連行動をどの程度起こすのか、それらの関連はどうなっているのか』を見ることを目的として本研究を行う。

(2) 暴力場面シナリオの追加

蔵長・片山らは先に挙げたように、研究における今後の課題として「いじめの種類と多様性を考慮した研究が求められる」と述べている。そこで本研究では蔵長・片山らが研究で用いた無視のないじめ場面を描いたシナリオとは別に、暴力的ないじめ場面のシナリオを新たに作成し、計2種類のシナリオを用いて調査を行うことでこの限界点を突破せんとした。

暴力的ないじめの場面を作成した理由は、文部科学省(2009)がまとめた、国公私立の小中高におけるいじめの態様についてまとめられた資料によった。資料によると、学校において起こったいじめの内、「仲間はずれ、集団による無視をされる」いじめと、「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする」、「ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする」いじめはほぼ同程度の割合で生起しているとされている。つまり無視のいじめと同程度目撃する割合が多く、

なおかつ無視によるいじめと対称の位置にある暴力によるいじめを同時に調査することによって、より包括的かつ現実に即した目撃者の心理の理解と、いじめ介入への視座を提供することができると考えたためである。

以上より、いじめの種類の違いによって目撃者の役割取得や共感が、その後の行動にどのような影響をおよぼすのか調査することを目的として、次の項目を仮説として設定する。

- 1, 無視場面, 暴力場面の双方において, いじめ関連行動に対して影響を持つのは, 共感よりもむしろ役割取得である.
- 2, 無視場面, 暴力場面の双方における, 傍観者に対する役割取得は被害者援助行動を抑制, 傍観行動を促進し, それとは逆に被害者に対する役割取得は被害者援助行動を促進, 傍観行動を抑制する.
- 3, 無視場面より暴力場面のほうが, 被害者への共感, 役割取得によって被害者援助行動が促進される.

2. 方法

(1) 対象者

A 大学に通う大学生 562 名 (男性 299 名, 女性 263 名) を対象に, 集合調査法による質問紙調査を行った. 質問への回答が欠落している場合や歪んだ回答がある場合は欠損回答とし, 分析の対象から除外する.

(2) 無視場面シナリオと暴力場面シナリオ

蔵長・片山ら (2008) が用いた 4 種類のシナリオで用いられている, 無視的ないじめに関連する語句や表現を, 文章構成をほぼ同一としながら, 暴力的ないじめに関連する語句や表現に変えたシナリオを新たに 4 種類作成した. 混同を避けるため, 蔵長・片山らが用いたシナリオ 4 種類を「無視場面シナリオ」, 新たに作成した 4 種類のシナリオを「暴力場面シナリオ」と呼称する.

「無視場面シナリオ」における 4 種類のシナリオとは, 共通の文章の中に, 「被害者」, 「加害者」, 「観衆」, 「傍観者」の 4 者それぞれに対して役割取得や共感が起こりやすい場面をそれぞれ組み込んだものである. これらを「無視 A シナリオ」「無視 B シナリオ」「無視 C シナリオ」「無視 D シナリオ」と仮称する. そして暴力場面シナリオにおいては, 先述の通り, 無視に関する語句や表現を, 暴力的なものに変更したものを組み込んだ. これらを「暴力 A シナリオ」「暴力 B シナリオ」「暴力 C シナリオ」「暴力 D シナリオ」とする. なおシナリオに付随する質問項目においても, 同様に無視に関する語句や表現を暴力的なものに変更した質問項目を新たに作成した (8 ページ, 9 ページ参照).

先行研究で用いられたシナリオ（無視場面シナリオ）

ある時、あなたはAが、Aと普股から仲のいいBたちに無視されているのを目撃しました。というのも、AがいくらBたちに挨拶をしたり、話しかけても、Bたちは知らんぷりして相手にしないのです。実際に、Bたちがある話題で盛り上がり、Aが入っていきこうとすると、Bたちが高に話をやめ、そっぽを向いてしまふということがあります。このときこの状況を見た周りの誰かが「シン」と言ったりはやりました、みんなどっと笑いました。周りには、見て見ぬふりをする人もいました。それからすぐに話題が変わり、Bたちは他の話題を話し始めました。

※シナリオA～Dのうちいずれか1種類を挿入

シナリオA（被害者に対する役割取得および共感の喚起）

Aは、なぜ仲の良かったBたちが自分が自分を無視するのか、どんなに一生懸命考えてみても思い当たる節がなく、原因が思い浮かびません。自分では以前から同じ行動を取っているつもりなのに、突然Bたちに無視され始めたのです。Aはどうしていいのかわからず、途方にくれているようです。

シナリオB（加害者に対する役割取得および共感の喚起）

このようなことになった原因には、AがBたちとの約束を何度もやぶっていたというところがあるようです。例えば、Aは、待ち合わせ時間も何度もすっぽかしたり、Bが大切にしているCDを約束の期限内に返さないということを繰り返していたようです。BたちはAのだらしない性格やいい加減な行動に迷惑をかけられているのです。

シナリオC（観衆に対する役割取得および共感の喚起）

この集団にはいつも、なんでも笑ってみんなを盛り上げようとする雰囲気があります。なので、どんなに些細なことでも取り上げて笑ったり、ふざけたりすることで、その場を盛り上げようとする人がたくさんいます。この集団では、このようなことが習慣的に行われているのです。

シナリオD（傍観者に対する役割取得および共感の喚起）

実は、無視されているのはAだけではなく、つい先日まではCが、その前にはDが無視されていました。Bたちは気に入らない人をターゲットにしては皆を巻き込んで無視をすることを繰り返して、無視される人が順番に回っている状態です。そのため、周りには誰かが無視をされていても、関わらずに黙っている人がたくさんいます。

Bたちはその後Aを無視し続けています。

暴力場面シナリオ

ある時、あなたはAが、Aと普股から仲のいいBたちに暴力をふるわられているのを目撃しました。というのも、AはBたちに代わり代わり殴られたり蹴られたりしているのです。Aが「やめて！」と言ってもそれにかまわず暴力をふるふを繰り返しています。

実際に、先生がある体罰時間などになると、Aを取り囲み、Bたちの暴力が始まるのです。このときこの状況を見た周りの誰かが「もつとやれ！Aなんかやっちゃまえ！」と言ったりはやりました。Bたちの暴力がより激しくなり、周りもそれを見てどっと笑いました。周りには、見て見ぬふりをする人もいました。休み時間が終わる頃になると、BたちはAから離れ、それぞれの席へ戻って行きました。

※シナリオA～Dのうちいずれか1種類を挿入

シナリオA（被害者に対する役割取得および共感の喚起）

Aは、なぜ仲の良かったBたちが自分に暴力をふるうのか、どんなに一生懸命考えてみても思い当たる節がなく、原因が思い浮かびません。自分では以前から同じ行動を取っているつもりなのに、突然Bたちから暴力をかけるようになったのです。Aはどうしていいのかわからず、途方にくれているようです。

シナリオB（加害者に対する役割取得および共感の喚起）

このようなことになった原因には、AがBたちとの約束を何度もやぶっていたところがあるようです。例えば、Aは、待ち合わせ時間も何度もすっぽかしたり、Bが大切にしているCDを約束の期限内に返さないということを繰り返していたようです。BたちはAのだらしない性格やいい加減な行動に迷惑をかけられているのです。

シナリオC（観衆に対する役割取得および共感の喚起）

この集団ではいつも、喧嘩や殴り合いといった激しいこと、面白そうなことが起こるとみんなではやしてよとする雰囲気があります。なので、今回のように一方的に殴られている場合でもみんなではやしてたり、笑ったりすることで、その場を盛り上げようとする人がたくさんいます。この集団では、このようなことが習慣的に行われているのです。

シナリオD（傍観者に対する役割取得および共感の喚起）

実は、暴力を受けているのはAだけではなく、つい先日まではCが、その前にはDが暴力を受けていました。Bたちは気に入らない人をターゲットにしては皆を巻き込んで暴力をふるうことを繰り返して、殴られる人が順番に回っている状態です。そのため、周りには誰かが暴力を付けていても、関わらずに黙っている人がたくさんいます。

Bたちはその後Aに暴力をふるふを繰り返しています。

第1研究の質問紙調査における質問項目

役割取得の測定項目

立場	質問項目
加害者	Bたちの立場に立とうとした
	Bたちはどのような気持ちだろうと想像した
被害者	Aの立場に立とうとした
	Aはどのような気持ちだろうと想像した
観衆	周りではやしたてる人の立場に立とうとした
	周りではやしたてる人はどのような気持ちだろうと想像した
傍観者	周りで見て見ぬふりをする人の立場に立とうとした
	周りで見て見ぬふりをする人はどのような気持ちだろうと想像した

共感の測定項目

対象	質問項目
加害者	Bたちの気持ちが分かる
	Bたちに共感を覚える
	Bたちが感じている気持ちと同じ気持ちを感じる
被害者	Aの気持ちが分かる
	Aに共感を覚える
	Aが感じている気持ちと同じ気持ちを感じる
観衆	周りではやしたてる人の気持ちが分かる
	周りではやしたてる人に共感を覚える
	周りではやしたてる人が感じている気持ちと同じ気持ちを感じる
傍観者	周りで見て見ぬふりをする人の気持ちが分かる
	周りで見て見ぬふりをする人に共感を覚える
	周りで見て見ぬふりをする人が感じている気持ちと同じ気持ちを感じる

いじめ関連行動の測定項目(先行研究, 無視場面シナリオ)

Aのそばにいてあげる	周りにいてはやしたてる
Aの話を聴いてあげる	周りにいてAが無視されるのを見て面白がる
Aをさける	周りにいてAが無視されるのを見て楽しむ
Aをなぐさめる	何もしない
Bたちと一緒にAを無視する	ただ見ている
Bたちに同調する	見て見ぬふりをする
Bたちに1人でやめるように言う	誰かと仲裁する
Bたちに誰かとやめるように言う	1人で仲裁する

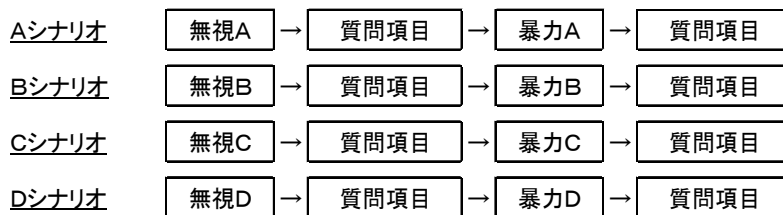
いじめ関連行動の測定項目(暴力場面シナリオ)

Aのそばにいてあげる	周りにいてはやしたてる
Aの話を聴いてあげる	周りにいてAが殴ったり蹴ったりされるのを見て面白がる
Aをさける	周りにいてAが殴ったり蹴ったりされるのを見て楽しむ
Aをなぐさめる	何もしない
Bたちと一緒にAを殴ったり蹴ったりする	ただ見ている
Bたちに同調する	見て見ぬふりをする
Bたちに1人でやめるように言う	誰かと仲裁する
Bたちに誰かとやめるように言う	1人で仲裁する

(3) 手続き

質問紙調査における手続きは、蔵永・片山ら(2008)らが行った調査の手続きを踏襲する。つまり、いじめ場面のシナリオを呈示した後、役割取得、共感、いじめ関連行動に関する質問項目について、それぞれ5件法による回答を求める形式を採った。

また、シナリオは(2)において記した8種類のシナリオを、2つずつ組み合わせて1部の冊子状にしたものを調査で用いた(表2)。なお、質問項目には一部「無視される」という言葉が使われているため、暴力場面シナリオの後に付随する質問項目では、シナリオを作成する際に、「無視される」の部分を「殴られたり蹴られたりされる」に改めたものを用いた。さらにこれらの組み合わせの順番を逆にしたものをA'シナリオ、B'シナリオ、C'シナリオ、D'シナリオとして作成した。逆順にしたシナリオを設定したのは、無視場面と暴力場面の呈示順による影響を考慮したためである。



※ 無視と暴力の組み合わせ順を逆にしたものをA'シナリオ、
B'シナリオ、C'シナリオ、D'シナリオとする。

表2 使用するシナリオ

3. 結果

(1) 被験者数

A 大学に通う大学生 562 名(男性 299 名, 女性 263 名)を対象に, 集合調査法による質問紙調査を行ったところ, 欠損回答数が 58 名(男性 38 名, 女性 20 名)となり, 最終的に 504 名(男性 261 名, 女性 243 名)の有効回答が得られた。

(2) いじめ関連行動の因子分析とその結果

1) 因子分析

無視場面と暴力場面の2つの場面シナリオにおけるいじめ関連行動の下位項目 16 項目について主因子法(promax 回転)による探索的因子分析をそれぞれ行った。因子分析では統計処理ソフト SPSS11.0J を使用した。

それぞれの分析結果から得られた固有値の変化から, 無視場面シナリオでは3因子, 暴力場面シナリオでは4因子が妥当であると示された。次にそれぞれの場面ごとに妥当であるとして示された因子数を仮定し, 再度主因子法(promax 回転)による因子分析を行った。その結果, 共通性と因子負荷量に関して十分な値が得られた。2度目の因子分析によって得られたそれぞれの場面シナリオの最終的な因子パターンと因子間相関を表3, 4に示す。なお回転前の因子数で16項目の全分散を説明す

る割合は無視場面シナリオでは 63.03%，暴力場面シナリオでは 67.81%であった。

表3 無視場面におけるいじめ関連行動の探索的因子分析結果

項目	因子負荷量			共通性
	F1	F2	F3	
F1: 加担・同調行動(回転前の固有値: 6.039)				
周りにいてAが無視されるのを見て楽しむ	.914	-.036	-.101	.806
周りにいてAが無視されるのを見て面白い	.884	-.045	-.104	.757
周りにいてはやしたてる	.793	.033	-.030	.598
Bたちと一緒にAを無視する	.706	.024	.142	.567
Bたちに同調する	.658	.053	.112	.464
F2: 被害者援助行動(回転前の固有値: 2.717)				
誰かと仲裁する	.060	.780	.087	.501
Bたちに誰かとやめるように言う	.042	.692	.051	.418
Aの話を聴いてあげる	-.174	.590	-.082	.531
Aをなぐさめる	-.067	.575	.090	.299
Aのそばにいてあげる	-.133	.574	-.104	.500
F3: 傍観行動(回転前の固有値: 1.275)				
ただ見ている	.033	.026	.882	.769
何もしない	.025	-.004	.860	.759
見てみぬふりをする	.053	.092	.855	.666
因子間相関	F1	F2	F3	
F1	—			
F2	-.360	—		
F3	.327	-.653	—	

表4 暴力場面におけるいじめ関連行動の探索的因子分析結果

項目	因子負荷量				共通性
	F1	F2	F3	F4	
F1: 加担・同調行動(回転前の固有値: 5.607)					
周りにいてAが殴ったり蹴ったりされるのを見て楽しむ	.894	-.008	-.065	-.075	.795
周りにいてAが殴ったり蹴ったりされるのを見て面白い	.858	.078	.018	-.092	.726
周りにいてはやしたてる	.809	.040	.085	.002	.672
Bたちと一緒にAを殴ったり蹴ったりする	.699	-.042	-.073	.090	.483
Bたちに同調する	.553	-.097	.046	.174	.350
F2: 被害者援助行動(回転前の固有値: 2.911)					
Aの話を聴いてあげる	-.009	.811	-.012	-.045	.635
Aをなぐさめる	.016	.746	.021	-.149	.434
Aのそばにいてあげる	.019	.613	-.095	.093	.527
誰かと仲裁する	-.052	.528	.065	.211	.418
Bたちに誰かとやめるように言う	.002	.506	.017	.159	.357
F3: 傍観行動(回転前の固有値: 1.322)					
ただ見ている	-.001	.014	.897	.023	.767
何もしない	-.048	-.076	.875	.024	.803
見てみぬふりをする	.018	.082	.799	-.089	.658
F4: 単独仲裁行動(回転前の固有値: 1.009)					
1人で仲裁する	.032	.037	.008	.853	.750
Bたちに1人でやめるように言う	.047	.018	-.072	.794	.711
因子間相関	F1	F2	F3	F4	
F1	—				
F2	-.327	—			
F3	.251	-.581	—		
F4	-.118	.559	-.579	—	

第1因子は5項目で構成されており、「周りにいてAが無視されるのを見て楽しむ」や「Bたちと一緒にAを無視する」など、いじめに加担したり、加害者たちに同調する内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「加担・同調行動」因子と命名した。

第2因子は5項目で構成されており、「Aの話を聴いてあげる」「誰かと仲裁する」など、被害者をなぐさめる行動が高い負荷量を示していた。そこで「被害者援助行動」因子と命名した。

第3因子は3項目で構成されており、「ただ見ている」「何もしない」「見て見ぬふりをする」という、いじめに対して傍観する内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「傍観行動」因子と命名した（なお先行研究における「傍観行動」因子と異なり、より純粋な傍観行動が下位項目に含まれていたという点が異なっていた）。

第4因子は2項目で構成されており、「1人で仲裁する」「Bたちに1人でやめるように言う」など第2因子の「被害者援助行動」因子と異なり、いじめや加害者たちに対して1人で仲裁する内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「単独仲裁行動」因子と命名した。

2) 各構造の検討

質問紙調査によって測定した4者に対する役割取得と共感、またいじめを目撃した者が取りうると思われるいじめ関連行動（無視場面では3種類、暴力場面では4種類）が、実際に生じうるのかについて検討を行った。各概念の構造については、いじめ関連行動は因子分析によって構造が十分に検討されたためこれを用いる。役割取得、共感は、「被害者」「加害者」「観衆」「傍観者」の4者毎に測定しているため、この4種類を構造として仮定する。検討を行う前に、これらの構造毎に平均値、SD、 α 係数を算出した。その結果を場面シナリオ別に表5、6に示す。

表5 無視場面における各構造の平均値, SD, α 係数

変数	平均	SD	α
役割取得			
被害者	3.83	1.15	0.77
加害者	2.41	1.18	0.66
観衆	2.11	1.12	0.67
傍観者	2.71	1.31	0.76
共感			
被害者	3.57	1.15	0.88
加害者	1.92	1.04	0.85
観衆	1.78	0.98	0.85
傍観者	3.01	1.27	0.87
いじめ関連行動			
加担・同調行動	1.34	0.60	0.88
被害者援助行動	3.36	0.92	0.80
傍観行動	2.68	1.24	0.90

表6 暴力場面における各変数の平均値, SD, α 係数

変数	平均	SD	α
役割取得			
被害者	3.81	1.19	0.77
加害者	2.02	1.08	0.58
観衆	2.08	1.12	0.61
傍観者	2.50	1.11	0.74
共感			
被害者	3.33	1.25	0.89
加害者	1.50	0.77	0.88
観衆	1.63	0.92	0.86
傍観者	2.94	1.34	0.89
いじめ関連行動			
加担・同調行動	1.21	0.51	0.87
被害者援助行動	3.50	0.93	0.80
傍観行動	2.53	1.24	0.89
単独仲裁行動	2.51	1.28	0.86

検討の具体的な手順を以下のように設定した。①測定した構造を構成する項目群について床効果を検討する。床効果の基準として、「平均から標準偏差を減じた値が、調査における最小値である1以下であった場合」に床効果が生じているとみなす。②各構造を構成する項目群のうち過半数の項目に床効果が生じていた場合、その構造はいじめ場面においては生起しないものと判断する。なおこの検討は役割取得、共感、行動が生じるか否かを検討するものであるため、天井効果については検討しないものとする。

各場面シナリオにおける検討を行った結果、無視場面では、役割取得は観衆以外の3者に生じ、共感被害者と傍観者にのみ生じていることが示された。いじめ関連行動においては、「加担・同調行動」は起こらず、「被害者援助行動」と「傍観行動」が起こることが示された。そして暴力場面では、役割取得と共感被害者と傍観者にのみ生じていることが示された。そしていじめ関連行動においては、「加担・同調行動」は起こらず、「被害者援助行動」、「傍観行動」、そして暴力場面でのみ起こりうる「単独仲裁行動」が起こることが示された。

(3) 共分散構造分析

いじめを目撃した者の役割取得や共感が、その後のいじめ関連行動にどう影響するのかを検討するため、共分散構造分析を行った。分析ソフトは Amos5 を使用した。分析を行うにあたっては、表で示された平均値と SD を用いた。また構造の検討において、このいじめ場面では生起しないとされた項目については分析対象から除外した。

これらを前提に共分散構造分析を行い因果モデルのパス図を作成したところ、無視場面での因果モデルでは GFI=.936, AGFI=.644, RMSEA=.225 となり、暴力場面での因果モデルでは GFI=.858, AGFI=.207, RMSEA=.322 となった。どちらも GFI と AGFI の間に大きく差があり、また RMSEA<0.1

を満たしていないため、十分な適合値が得られたとは言えなかった。

そこで蔵長・片山らの先行研究と同様、有意でないパスを削除しパス図を単純化するなど、モデルの修正を行った。修正の結果、無視場面の因果モデルでは GFI=.934, AGFI=.794, RMSEA=.168 となり、暴力場面での因果モデルでは GFI=.854, AGFI=.629, RMSEA=.218 となった。双方とも十分な適合値の指標である RMSEA<0.1 を満たしていないが、単純化する前と比べて、AGFI の増加している点を考慮し、単純化したパス図を採択する。これらの因果モデルをパス図化したものを表 7, 8 に示す。なお暴力場面での因果モデルのほうが RMSEA の値が高くなっているが、これは暴力場面での因果モデルのほうがより複雑であることを示しているものと思われる。

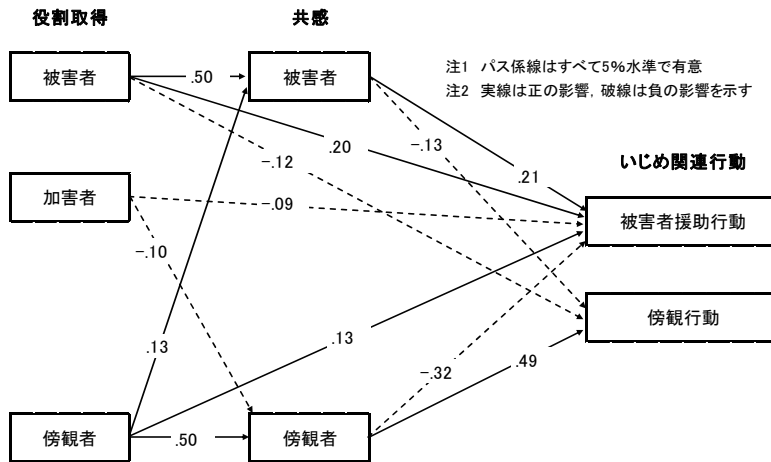


表7 共感が生じてからいじめ関連行動に至るまでの因果モデル(無視場面)

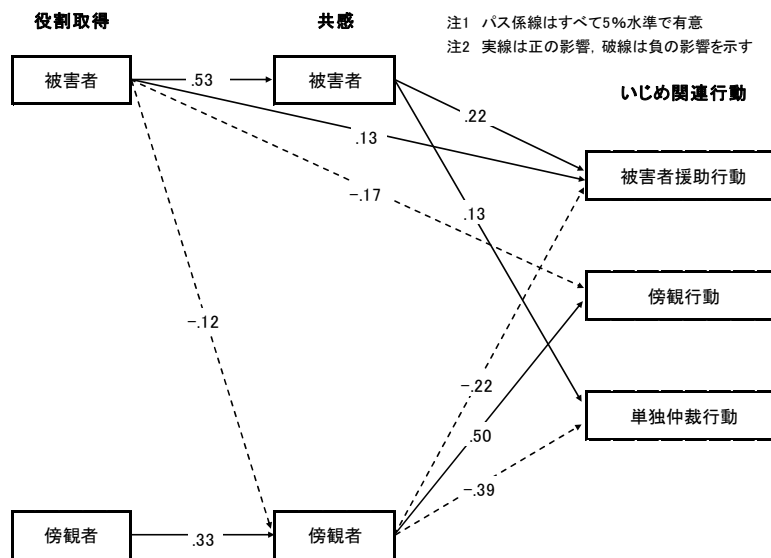


表8 共感が生じてからいじめ関連行動に至るまでの因果モデル(暴力場面)

仮説について検証する。

仮説1「無視場面、暴力場面の双方において、いじめ関連行動に対して影響を持つのは、共感よりもむしろ役割取得である。」

無視場面のシナリオでは役割取得と共感のどちらが影響を持っているかを十分に説明できなかった。暴力場面のシナリオでは共感よりも、役割取得のほうがいじめ関連行動に強い影響を有していることが見られた。

→ 十分に支持されない。

仮説2「無視場面、暴力場面の双方における、傍観者に対する役割取得は被害者援助行動を抑制、傍観行動を促進し、それとは逆に被害者に対する役割取得は被害者援助行動を促進、傍観行動を抑制する。」

無視場面、暴力場面双方において、被害者への役割取得は仮説を指示される結果が見られた。傍観者への役割取得では、無視場面においてごく微弱であるが仮説と正反対の影響を有しており、暴力場面にいたってはまったく影響がないという結果となった。

→ 被害者への役割取得は支持される。傍観者の役割取得においては支持されない。

仮説3「無視場面より暴力場面のほうが、被害者への共感、役割取得によって被害者援助行動が促進される。」については、相関係数上大きな違いは見られなかった。

→ 支持されない。

4. 考察

第3節において得られた結果について、3つの視点で比較を行い、考察を行う。

(1) 先行研究と本研究（無視場面シナリオ）との比較と考察

先行研究と本研究の結果における共通点として、「いじめの現場を目撃した後は、いじめに加担したり、加害者に同調するような行動が生起しない」、また「被害者に対する役割取得は、被害者援助行動を促進し、傍観行動を抑制する」ことが示された。これはいじめの現場を目撃した場合、いじめられている被害者にまず目が行きやすいことを示していると思われる。被害者に目を向けた結果、被害者への同情や共感が生起され被害者を助けようとし、逆にいじめを見て見ぬふりをしたり、加害者に加担する行動が抑制されるということを示しているとも考えられる。

先行研究と本研究の結果における相違点として、先行研究で示された「観衆に対する共感」が生じないという点に加え、本研究では「観衆に対する役割取得と共感、そして加害者への共感の3つが生じない」ことが示された。この結果は「いじめを目撃した者は、周りではやし立てている者への共感やその立場の理解をしようとしにくい傾向がある」ことを示している。また加害者に対する役割取得が

生じているのは、いじめの場面を見た時に「なんでいじめているのだろう」と考え、その立場に立とうとするからであると考えられる。

これらから目撃者は無視によるいじめの場面を目撃した直後、被害者や傍観者への役割取得や共感を強く持ち、周囲ではやし立てている者や加害者へは共感をほとんど持たないと考えられる。そして被害者への共感を強く持った目撃者は、目撃後の行動として被害者を助けたりいじめを抑制する行動を取りやすいため、被害者への共感を持ちやすいよう目撃者に求めていくことが、いじめ対策に繋がらうる可能性があると思われる。

(2) 無視場面シナリオと暴力場面シナリオとの比較と考察

無視場面シナリオと暴力場面シナリオの結果における共通点として、「被害者に対する役割取得が、被害者を助ける行動を促進し、傍観行動を抑制する」と「傍観者への共感が、傍観行動を促進し、被害者を助ける行動を抑制する」の2点が挙げられた。前者は本節(1)先行研究と本研究との比較と考察で考察をしているので、再度の考察は省略する。後者はいじめの種類に関わらず、傍観者の気持ちを共感しようとすることは、見て見ぬふりをすることを促し被害者を援助することを妨げる、ということを示している。これは傍観している人たちの気持ちを理解しようとする、傍観者がなぜ傍観的な行動を取っているのかや、被害者を助けないまたはいじめに関わろうとしない理由を考えることになり、結果として傍観行動の促進と被害者援助行動の抑制につながっていると考えられる。

無視場面シナリオと暴力場面シナリオの結果での相違点として、2点で大きく異なる点が見られた。1点目は、目撃者は暴力によるいじめの場面を目撃した後に、「単独仲裁行動」を起こしようということである。これは目撃者がいじめ場面を目撃する際に、無視によるいじめよりも暴力によるいじめを“より危険で、誰かと一緒ではなくとにかくすぐにいじめを止めなければ”という認識を持ちやすいという可能性を示唆していると考えられる。

2点目は、無視場面シナリオにおいて「傍観者の役割取得」が「被害者への共感」と「被害者援助行動」へ非常に弱い正の関連を有しているといった因果関係のパスが見られた点である。つまり無視によるいじめが起きている場面では、暴力に依るいじめが起きている場面と異なり、傍観者の立場に立ったとしても被害者をかわいそうに感じたりいじめを止めようとするところがあることを示している。これはいじめを目撃するといじめを助けた結果、目撃者自身に被害が及んだ場合を想像しているのではないかという事が考えられる。

Ⅲ. 第2研究

1. 問題と目的

第1研究の結果、傍観者に関連する要因において非常に特徴的な結果が見られた。つまり、「無視場面において「傍観者」の立場に立つことが、被害者への共感と被害者を援助する行動を促進する」

という点であり、もう1点が「傍観行動を抑制する要因が場面によって異なる」という点である。

現在のいじめ研究において、4層構造の役割としての「傍観者」の心理的な特徴について焦点を当てた研究は多いとは言えない。また傍観者についての一般的な認識としては「いじめについて見て見ぬふりをしている人」「いじめに直接は関係ない存在」という認識がほとんどである。しかし森田・清水（1994）、塚本・田名場（2007）らによれば、「傍観者」の行動によって「加害者」のいじめ行動が変容される、との指摘がなされており、いじめへの実際の対策を考える上で、傍観者への介入は不可欠であると思われる。そして介入を行うためには、「傍観者がどのような心理的な特徴を有しているか」と「どうしたら見て見ぬふりをやめさせることができるか」という点の理解が不可欠となることは自明である。

そこで第2研究では、以下の2点を目的として設定する。

目的1： 被験者に傍観者の立場に立ってもらい、傍観者としてどのような認知を持ったり、どのように見られているかを調査することによって、傍観者の心理的な特徴を追究する。

目的2： 「どのような出来事があつたら傍観行動をしないと思うか」についてインタビュー調査を行い、傍観行動を抑制する出来事としてどのようなことが考えられるかを調査する

2. 方法

(1) 対象者

A大学に通う大学生および大学院生 12名（男性6名、女性6名 平均年齢：23.7歳、SD：2.54歳）を対象に、半構造化面接によるインタビュー調査を行う。

(2) 半構造化面接によるインタビュー調査

第1研究（質問紙調査）で用いた、いじめ場面について書かれた場面シナリオを呈示する。また、この時被験者には「このいじめの場面を見た後に、見て見ぬふりをすることにした人」として想像しながら場面を読んでもらうこととする。場面シナリオを被験者に目を通してもらった後に、あらかじめ設定した質問をする半構造化面接を行う。

(3) シナリオ

半構造化面接で用いる場面シナリオは、第1研究で用いたいじめの場面シナリオのうち、傍観者へ役割取得や共感を起こしやすくする刺激文を挿入した「無視Dシナリオ」と「暴力Dシナリオ」を用いる。被験者には2つのシナリオのうちどちらか一方を呈示する。

どちらか一方を呈示する理由は、以下の2点による。1点目は、被験者には「見て見ぬふりをすることにした人」として想像してインタビューを受けてもらうため、2つの場面について連続して調査

を行うと、被験者の負担が大きくなることが考えられるためである。2点目は、第1研究と異なり対象人数の少なさから、呈示順の効果を見るための統制群の設定が困難であるためである。

(4) 手続き

上記で述べた2つのシナリオのうち、無視場面シナリオと暴力場面シナリオのどちらか一方を被験者に手渡した後、以下の内容を被験者に伝える。

「ここに、あるいじめの場面について書かれたものがあります。これを今から私が読みますので、目で追って行ってください。あなたは、この場面を目撃した後、このいじめについて見て見ぬふりをするにしました人として、想像しながら読んでみてください。読み終わりましたら、こちらからいくつか質問をさせていただきます。それでは読んでいきますので目を通して行ってください。」

またこの調査では、被験者に自由に場面シナリオを読んでもらわず、調査者が読み上げる。これは被験者が場面シナリオを読む際に、読みこぼしや誤読が発生するのを防ぐ目的がある。以上の文章を被験者に伝えた後に、調査者がシナリオを読み上げる。

シナリオ読了後、あらかじめ設定した質問（19ページ）を被験者に行う。質問項目は、傍観者の心理的な特徴を捉えるために、①傍観者から周りへの認知、②周りからの認知、③周りの認知への受け止め方、の3種類の質問群と、傍観行動を止めるためにはどのようなことが考えられるかを見るため、④傍観行動をしない出来事、の4種類、計16項目の質問群で構成した。

(5) 分析方法

半構造化面接内で得られた回答について分析を行う。分析方法はKJ法を参考にしたカテゴリー化を行い、整理・分析を行うものとする。カテゴリー化に際しては、心理学を学ぶ大学院生2名の協力をあおぎ、筆者含めて計3名の分析者によって分析され、3名の合意が得られたものをカテゴリーとして採択する方法を採った。

第2研究（半構造化面接）で行う質問内容

周囲への認知

- あなたは、被害者の A に対してどのように思いましたか
- あなたは、加害者の B たちに対してどのように思いましたか
- 周りではやしたてる人たちに対してどのように思いましたか
- 周りで見て見ぬふりをしている他の人たちに対してどのように思いましたか

周囲からの認知

- あなたは、被害者の A からどのように見られていると思いますか
また、そう見られていることについてどのように思いましたか
- あなたは、加害者の B たちからどのように見られていると思いますか
また、そう見られていることについてどのように思いましたか
- 周りではやしたてる人たちからどのように見られていると思いますか
また、そう見られていることについてどのように思いましたか
- 周りで見て見ぬふりをしている他の人たちからどのように見られていると思いますか
また、そう見られていることについてどのように思いましたか

傍観行動を取らない出来事

- あなたは、このいじめの場面を目撃した後に、どのようなことがあつたら、きっと見て見ぬふりをしなかつたらと思うですか。またその後どうなったと思いますか。

以上 9 個（周りの認知への受け止め方を含めると 16 個）の、口頭による自由回答形式の質問を行う。

（6）分析における着眼点

被験者から得られた回答を分析するにあたって、以下の点を着眼点として分析を行う。

- 1, 傍観者が、周りの人々に対してどのような認知を持ち、また周りからどのように見られていると思っているかについてカテゴリー化を行う。
- 2, 周りから見られている認知に対して、どのように受け止めるかを分析・整理する。着眼点 1 でのカテゴリー毎にどのような受け止め方をしているかを検討し、その傾向性を見出す。
- 3, 傍観行動をしなくなる出来事（傍観行動の生起を抑制する要因）についてカテゴリー化を行う。

3. 結果

対象者である大学生・大学院生 12 名に半構造化面接を行った。内訳として、男女数及び総数が均一になるよう、シナリオ毎に男女 3 名ずつの被験者数とした。以下に質問の種類ごとの結果を示す。

(1) 周りの対象への認知

被害者への認知に関する回答を分析した結果、無視場面シナリオでは「かわいそう」や「どうしてこうなったのか」という認知が語られる傾向が強く、暴力場面シナリオでは「かわいそうだ」という認知が語られる傾向が強いことが示された。つまり暴力場面シナリオでは「どうしてこのようないじめが起こったのか」という、いじめのきっかけについて気にするといった認知が起こらずに、主として「かわいそうだ」という認知が生じてることが示される。これは、熊谷 (2006) がシナリオ調査を行った結果に考察した「攻撃が継続的であり、加害者と被害者が仲良しである場合、攻撃の原因を被害者の性格に帰属しやすい」という結果が得られた」という知見に添うものであると考えられる。しかし、熊谷 (2006) が用いたシナリオは暴力的ないじめに関するものであり、今回の結果と正反対の結果となった。その理由として、暴力場面では、被害者に対して視線を向ける際に、いじめの原因よりも、激しく傷めつけられている被害者に対する同情が起こっていることが考えられる。

加害者への認知の分析の結果、無視場面シナリオでは「自分勝手」や「横暴」といった加害者を否定的に見るような認知が起こり、暴力場面シナリオにおいても「むかつく」、「ひどい」、「卑怯」、「ひどい」という否定的評価の側面を持った認知が起こることが見られた。つまり、加害者への認知では、場面に関わらず常に否定的な評価の側面を持った認知を行う傾向があり、特に暴力場面においてより強い否定が見られることが示された。その理由として、いじめを加えている加害者を肯定的に見ておらず、特により激しいいじめを行なっている加害者に対しては、より否定的な目で見ているためである、ということが考えられる。

観衆への認知の分析の結果では、無視場面では「少し嫌だが、客観的に見ている」という色合いの認知が起こっており、暴力場面では、「ずるい」「Bたちより卑怯だ」など、観衆に対して、より否定的な認知を起こしていることが示された。その理由として、加害者への認知と同様の出来事が起きていると思われる。観衆を加害者の一員として見ている、という特徴がここからも窺い知ることが出来る。

他の傍観者への認知の分析の結果では、共通する認知の特徴として、「何も言えない」という認知が語られる傾向が強いことが示された。また無視場面ではこれ以外の認知として傍観者のことを「関わらないようにしている人」という認知を行っており、暴力場面では傍観者のことを「自分と同じ」「仕返しを恐れている人」という認知で見ていることが示されており、この点が場面による相違点であると挙げることが出来る。

これらの点を比較して検討してみると、暴力場面において、傍観者を見る際には「自分と照らしあわせて」、「なぜいじめに関わらないのかを」より詳細に見ている、という点が特徴として挙げられ

るだろう。その理由として、第1研究で得られた『暴力を伴う激しいいじめ場面を目撃した時、「すぐにいじめを止めなくては」という考えが起こり、「誰かと協力して」という認識を持つ前に行動を起こすのではないか』という知見から窺い知ることが出来ると思われる。つまり、すぐにも助けなければならない状況にあって、見て見ぬふりをしている自分自身に対して、より自罰的な目線で自分自身を見ているのではないか、と思われる。

以上から、周りの対象への認知では、無視場面に比べて暴力場面の方が、より程度の強い認知を行なっていることが考えられる。その理由として、無視場面よりも暴力場面のほうが、いじめの度合いが激しいためにその場の緊張がより高まっており、被害者への同情的な認知が起こりやすくなり、加害者や観衆へはより否定的な認知を起こしやすくなり、他の傍観者を通した自分自身への認知がより自責的になるということが考えられる。

(2) 周りの対象からの認知

被害者からの認知の回答を分析した結果、無視場面では「助けてほしい」「どうも見ていない」という認知で見られていることが語られ、暴力場面では「助けてくれない人」「いじめに関わりたくない人」という認知で見られていることが語られた。つまり、傍観者は、暴力場面において、被害者から自分自身を責められているような認知で見られていると思っていることが示された。その理由として、暴力のいじめ場面を目撃した際傍観者は、被害者が殴る蹴るの暴行を加えられている場面を見ている自分と、助けたくても助けていない自分という葛藤状態にあり、不安定な状態にあるため、被害者から責め立てられている、と思っているものと思われる。

加害者からの認知の分析結果では、「気にしていない」「なんにも思われていない」という認知を持たれている、という点で共通が見られた。また無視場面では「もし何か言ってきたら次はお前たちだぞ」という牽制的な認知を持たれている、と回答があったが、暴力場面では「下に見ている」や「次のターゲットの1人」という認知を持たれている、という相違点が見られた。つまり、暴力場面において、傍観者（被験者）への否定的な認知の度合いが強くなっていることが示されていると考えられる。その理由として、傍観者が自分自身を「何もできない者」という否定的な自己認知を起こしており、それが周囲からの“下に見られている”という外的な目線として現れているのだと考えられる。

観衆からの認知の分析の結果では、無視場面においては「気にしていない」という認知を持たれていると語られたが、暴力場面では「何も出来ないね、と見られている」という認知があるということが語られた。つまり、暴力場面では、傍観者自身が“より役に立たない存在”として見られている、ということが示された。これは加害者からの認知と同様だと考えられる。

他の傍観者への認知では、無視場面の「自分と一緒に」という認知と暴力場面の「同類」という認知に共通が見られ、また、無視場面の「何とも思われていない」と暴力場面の「無関心」という点においても共通点が見られた。

周りの対象からの認知を分析した結果、暴力のいじめ場面において、「被害者」、「加害者」、「観衆」の3つの対象からの認知として、「より傍観者（被験者）を責めたてるような認知があるのではないか」と傍観者（被験者）自身が感じていることが示された。その理由は、傍観者が自分自身に対して持っている否定的な自己認知が、外的な視線となって現れているのではないかと、と思われる。つまり、無視場面と暴力場面では、暴力場面において、傍観者は強い自己卑下と、そこから派生して周りから責められている感覚を有しやすいのではないかと、ということが示唆された。

（3）周りの認知への受け止め方

被害者の認知への受け止め方を分析した結果、無視場面では「助けたいけど、それがはばかれる」というように思う傾向があり、暴力場面では「申し訳ない」や「自己嫌悪」や「葛藤を感じる」と思う傾向があることが語られた。これらから、無視場面よりも暴力場面において、より自責的な葛藤が強く起こっていることが示された。

加害者からの認知への受け止め方では、「特定の人物として見られていない」に対しては「安心」を感じ、それ以外の認知に対してはほとんどで、「怖い」と感じる、という点で共通した回答が見られた。

観衆からの認知に対しては、無視場面では「気にしていない」という認知に対して「夢中なんだろうな」や「見られてないならいいや」と受け止め、「ノリが悪い」という認知で見られていることに対しては「関わりたくない」というように観衆から距離を置こうとする受け止め方の特徴が見られた。また暴力場面では、どのような認知を持たれているか、というカテゴリーの枠を越えて、「その人達のほうが臆病」や「お前らとは一緒にはならない」、「そっちのほうが愚かだから」といったように、観衆に対してネガティブな評価を行う、という受け止め方をしていることが語られた。

他の傍観者からの認知への受け止め方では、無視場面では「同じ気持ちなんだろうな」と見られていることに対して、「こっちもそう見て安心する」「そうだね」「安心する」など、安心を感じつつ受け止めているということが語られ、暴力場面では「一緒だな」や「同じように思っているのかな」という認知に対して、「不快感は感じない」や「変な仲間意識を感じてほっとする」、「悪い意味での連帯感を感じる」といった受け止め方が語られた。以上から、他の傍観者が自分に対して思っていることを認めつつ、それに対して安心や連帯感を感じる、という受け止め方をしているということが示された。

これらから、周りの対象からの認知への受け止め方では、「被害者」への受け止め方の場合、暴力場面において、より自責感が強い受け止め方をする傾向が見られ、「加害者」への受け止め方では、2つの場面に共通した点として、恐怖を感じながらの受け止めを行なっている傾向が見られた。そして「観衆」に対する受け止め方では、暴力のいじめ場面で「観衆」に対してより強いネガティブな評価を行いながらの受け止めが見られ、「他の傍観者」に対する受け止め方では、安心や奇妙な連帯感

を感じつつ受け止めている、という傾向が示された。

（４）傍観行動をしない出来事

無視場面における傍観行動をしない出来事として、「Aに物理的な被害があったら」や「暴力に発展」「ケンカになったら」など、【いじめの変化】がカテゴリーとして挙げられた。一方で暴力場面においては、「Aが助けを求める」といった【Aからの援助要請】、「Aが反撃して互角に戦って抵抗したら」などの【Aの反撃】、「周りが立ち上がったら」などの【自分以外の周りの変化】の3つがカテゴリーとして挙げられた。無視場面における【いじめの変化】と、暴力場面における【Aの反撃】は、いじめがケンカに変化する、という点で共通していると言えるだろう。しかし、【Aからの援助要請】と【自分以外の周りの変化】は暴力場面にものみ限られて語られた出来事であることが示された。

その理由として、暴力によるいじめと異なり、無視のいじめは「怪我」などといった身体的・表面的な被害を伴わないいじめであるため、被害者が加害者や観衆以外に「助けてくれ」と声をあげにくいという可能性が考えられる。さらに、被験者を含めた傍観者からも声があがりにくい、ということが併せて考えられる。

4. 考察

傍観者は、被害者に対しては同情的な感情を持つと同時に、被害者を助けていないことから来る自責的な感情を持ちやすく、そこから葛藤を感じやすいという傾向が見られた。特に被害者からの認知・視線を意識した際には、その葛藤がより強く起こることも併せて見られた。

次に加害者や観衆といった、いじめを行なっている者に対しては、傍観者は彼らを否定的な目で見ている、という認知の傾向が示された。その一方で加害者と観衆から否定的な認知を受けた場合において異なる点も見られた。すなわち加害者から否定的な認知を受けた場合、傍観者は恐怖を感じやすく、観衆から否定的な認知を受けた際には、それに反発するような形で、観衆への否定的な評価をするような側面を持つ認知を行いやすい、という点である。

他の傍観者に対しては、傍観者からの認知においても他の傍観者からの認知においても、「無関心な人」「自分と同じような人」というように、ネガポジのどちらにも属さない認知を行いやすいことが示された。しかし、暴力場面での他の傍観者からの認知への受け止め方において、「助けてあげて、と思われることにプレッシャーを感じる」や、「変な安心感を覚える」といった回答も併せて見られた。つまり、傍観者が他の傍観者との関係において感じるものは、すべてニュートラルなものではなく、時に奇妙な感じを持ったり、居心地の悪さ、といったものを感じているかもしれないことが示された。

以上から、傍観者が非常に多彩な認知を行い、周囲からの認知を感じた結果、様々な受け止め方を

していることがわかる。本研究で得られた以上の特徴は、傍観者の心理過程を理解するための一端となりうるかもしれない。

IV. 今後の課題

本研究で行った2つの研究調査において、いくつかの課題が残された。それらを各研究ごとに以下に示す。

1. 第1研究の課題

第1研究において、共感が生じてからいじめ関連行動に至るまでの関連モデルを示した。その中で、目撃者が取ると思われる行動や因果関係が、いじめの場面によって変化するという点が特徴として見られた。しかし、「加害者に対する役割取得や共感」、「観衆に対する役割取得や共感」においては、どちらの場面でも生じなかったことが示された。これは加害者や観衆と、目撃者との間の関係を説明する文章が、シナリオの中に明記されていない点によるものであると思われる。

本研究において加害者や観衆に対する役割取得や共感を測定するには、この点からも限界があると言える。そのため、今後の研究においては、いじめの態様の変化といった「状況の変化」だけではなく、他の要因による行動や心理の変化を調査・測定し、より多面的な目撃者の心理を追究することが望まれる。具体的には、目撃者と被害者、目撃者と加害者、目撃者と観衆との関係性を考慮した場面の設定などが考えられるであろう。

そのため今後は役割取得から共感への関連を入れ替えた結果などについても吟味し、いじめ場面における行動に対して役割取得と共感がどのような関連を有しているのかを十分に調査する必要があるだろう。

また別の課題として、役割取得という概念を測定する項目の精査と、役割取得と共感との関連の順序についての実証の必要性が挙げられる。まず役割取得についての精査であるが、先行研究と本研究の無視場面、暴力場面において、各質問項目群について統計的に検討を行ったところ、役割取得に関する質問項目群の α 係数が、共感やいじめ関連行動のそれと比べて低いことが見られた。つまり、先行研究と本研究における質問紙調査において、役割取得に関する質問が被験者にとって分かりにくいものであった可能性がある。目撃者の心理的な動きをより細密に捉えるためにも、この課題は十分に吟味されるべきものであると思われる。

また、役割取得と共感との関連の順序についての実証についてだが、先行研究と本研究の2つの場面において、いじめ関連行動に影響を与えるとされた要因がすべて異なっていた点が大きな課題であろう。実際にいじめ関連行動に影響を及ぼすのはどの要因であるのか、また共感と役割取得との関連の順序はこれでよいのかなどを実証的に調査・追求する必要があると考えられる。

本調査では、無視のいじめに対応させるいじめの態様として、暴力によるいじめを取り上げ、調査を行った。しかし、文部科学省の調査(2009)によると、「冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、

嫌なことを言われる」といった態様のいじめを受けたことがあるとする生徒が調査全体の64.1%を占めているとされており、さらに現在大きな問題として取り上げられているネットいじめ（インターネット上に誹謗中傷を書かれるなどするいじめ）などについても、どのような心理に基づいて行われ、どのような影響を持ち、どのような介入が考えられるか、について考察していく必要性は十分に高いものと思われる。

2. 第2研究の課題

塚本・田名場（2007）は、第三者と被害者との関係についての考察において「親しい友人がいじめの被害者となったとき、傍観者の葛藤は一層強くなるものと考えられる。」と示した。仮に傍観者と仲が良い被害者がいじめられているといったシナリオを用いた場合、傍観者の心理過程において強い葛藤が起こることが考えられる。また半構造化面接における被験者からの回答でも、「被害者がもし親友だったら」という言葉が見られた。このことから、第1研究と同様、傍観者といじめ場面における周りの対象との関係性について十分に考慮されていないことが課題として示されていると思われる。

さらに、被験者が実際にいじめ場面を見たりした経験の有無についても、本研究の限界と今後の課題として挙げたい。本間（2003）はいじめの加害経験や被害経験の有無が、いじめ抑制行動に影響を及ぼしていることを示唆した。しかし本研究においては、被験者に対して過去のいじめ経験について聞くことによって、被験者に対して強いプレッシャーを与えうるという点を考慮して、聞き取りを行わなかった。もしいじめ場面目撃の有無を問う研究を行う場合は、その点について十二分に考慮した研究が今後の展望として望まれるであろう。

また傍観者の心理過程を詳細に見るために、被験者数をさらに多く増やす必要が考えられる。傍観者の心理過程は非常に特徴的であり、傍観者以外の存在によって多大な影響を与えられているため、様々な要因を統制群として設定し、多くの被験者に調査することこそ、傍観者研究において必要なことだと思われる。

しかし取りこぼしてはならないのは、傍観者の中には様々な背景を有する学生が存在している、という点である。本調査によって、傾向性の一端を掴むことができたかもしれないが、傍観者一人ひとりにおいて、見て見ぬふりをする理由や、それを引き起こす要因は千差万別であり、安易に一般化して捉えることは、強い危険をはらんでいる、この点を改めて強調し、本研究の限界点、課題点として据えることとする。

参考文献

- デルウィン・P・タツム,デヴィッド・A・レーン編(1996).影山任佐,斎藤憲司訳,いじめの発見と対策——イギリスの実践に学ぶ,日本評論社
- 橋本摂子(1999).いじめ集団の類型化とその変容過程—傍観者に着目して— 教育社会学研究,**64**,123-142.
- 本間友巳(2003).中学生におけるいじめ停止に関連する要因といじめ加害者への対応 教育心理学研究,**51**,390-400.
- 熊谷 隼(2006).いじめ被害者への否定的評価に関する要因分析—シナリオを用いた質問紙実験— 東洋大学大学院紀要,**43**,35-54.
- 蔵永 瞳・片山 香・樋口匡貴・深田博己(2008).いじめ場面における傍観者の役割取得と共感が自身のいじめ関連行動に及ぼす影響,広島大学心理学研究,**8**,41-51.
- 餅川正雄(2011).学校のいじめ問題に関する研究 広島経済大学研究論集,**34**(2):65-84
- 文部科学省(2009).平成20年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について
(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/11/_icsFiles/afieldfile/2009/11/30/1287227_1_1.pdf) (2012年7月13日)
- 森田洋司・清水賢二(1994).新訂版 いじめ—教室の病い— 金子書房
- 大坪治彦(1999).いじめ傍観者の援助抑制要因の検討 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育学部編,**50**,245-256.
- 齋藤 友範(2000).傍観者の意識構造といじめの集団構造 東京大学学校臨床研究,**1**,38-48.
- 坂西友秀・岡本祐子(2004).シリーズ荒れる青少年の心 いじめ・いじめられる青少年の心 北大路書房
- 清水貴裕・瀧野揚三(1998).いじめの加害者に影響する被害者と第三者の反応 大阪教育大学紀要,第IV部門,**46**,347-363.
- 杉田明宏・若松養亮・杉山弘子・菊地則行・片岡 彰・菊池武烈・寺田 晃(1989).中学生のいじめに対する態度とその背景—対人関係からのアプローチ— 青年心理学研究,**3**,29-38.
- 竹ノ山圭二郎・原岡一馬(2003).いじめ状況想起におけるいじめ判断についての立場間比較 久留米大学心理学研究,**2**,49-62.
- 登張真稲(2005).共感喚起過程と感情的結果,特性共感の関係—性の類似度,心理的重なるの効果— パーソナリティ研究,**13**,143-155.
- 塚本琢也・田名場忍(2007).いじめ場面における第三者の傍観・仲裁行動の発生・抑制要因の探索的研究 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要,**4**,19-29